

# 佐伯地方の姓氏(十五)

— 阿南・池田 —

## 佐 脇 貫 一

(会員・佐伯市長良)

### 劍士阿南唯七のこと

鶴藩略史にいう。

安永二年(一七七三)九月十五日、中小姓穴見唯七老を以て致仕す。人為り豪武、劍を善くす。源林公(佐伯藩六代高慶)始めて佐伯に入るとき、劍客恵良甚右衛門を従ふ。唯七と劍技を競ひ、相対すれば唯七に勝あるのみ。公、唯七をして大島海関に謫す。(謫は謀である。はかると読んでよい)孤島なるを以てこれに抗する者なく、技まさに漸波すべしと。居ること三年、復た技を闘はずに勝負前の如し。公、感嘆し、自ら親しくこれに学び、ついに後世子孫をして唯七に学ばしむるを恒例としぬ。

穴見唯七ははじめ珍賀といい、藩の茶道(茶坊主、普通お坊主といった)をしていたが、人となり剛勇で武功を好み、ついに蓄髪して武士となり、三神流の劍を善くした。南昌公(五代高久)のころ用いられて徒士となり、氏を阿南と改称した。

元禄十四年(一七〇一)五月、高慶(当時周防守高定)ははじめてお国入りし佐伯城に入った。高慶は入封にあたって、江戸より一刀流の劍客恵良甚右衛門を同伴して来たが、ある時高慶は阿南唯七が三神流の劍を善くすると聞き、命じて甚右衛門と試合をさせたところ、唯七の勝となった。高慶はさらに唯七の技を試したく思い、浦奉行として佐伯湾口の離島大島に赴任させた。それは劍技を磨く相手のない離島に勤務すれば、自然唯七の武技

も鈍るであろうと考えたからであった。やがて唯七は浦奉行三年の任期を終えて、大島から城下に戻って来た。高慶は唯七に再び恵良甚右衛門との試合を命じた。しかし、このときも唯七の勝になった。

唯七は大島にあるとき、つねに島民を相手に剣技を練り、万一の時に備えた。島民たちも唯七の真意を察し、進んで相手をした。その後大島の島民が剣法を好むようになったのは唯七の感化だといわれている。

阿南唯七と再度剣技を競って敗れた恵良甚右衛門は、その後も高慶に仕えていたが、元文五年（一七四〇）七月、分限を願わず身持ち悪しとあって追放された。

### 阿南氏は豊後大神氏族

阿南氏はいうまでもなく豊後大神氏の一族で、大分郡阿南荘（現庄内町一帯）に勢力を占め、小原・大津留・松尾・武宮・橋爪等の諸氏が分出している。大神一族が豊後中南部の実力者であったのは平安中期から同末期までの約二百五十年間で、一族の雄緒方惟栄兄弟が源氏の旗上げに呼応して平家滅亡に一役を買い、鎌倉幕府の成立を見たが自らは宇佐宮焼亡の罪を問われて栄光の座か

ら顛落した。つまり大神一族は鎌倉政権の確立によって時代からはみ出し者、一介の土豪になったのである。

大友家文書録などによると、建久七年（一一九六）大友能直は豊前・豊後両国の守護職となり、古庄重能を先手として豊後浜脇浦に上陸したが、このとき阿南惟家は高崎山に、弟家親は戸次の鶴ヶ城に籠り、大野郡大野荘の神角寺山に挙兵龍城した大野泰基と連繫して大友軍に抵抗したという。

もっともこれは大友氏の豊後下向に対する地元土豪の反抗を述べた史伝であるが、大神一族にとってはその没落を記録した一齣ひととせである。史実からいえば建久年中の豊後守護は大友能直の養父中原親能で、しかも親能が天野遠景に代って鎮西守護人に任命されたのは建久六年であった。天野遠景は謀叛人追捕に名をかって、九州の土豪に対し頗る苛酷な処置をしたというが、当時すでに大神緒方の一党は往昔の勢力を失っていた。

阿南惟家兄弟の反抗はそれほど強力なものではなかったが、新統治者にとって旧勢力の抵抗は不快そのものであった。阿南氏は本拠阿南荘を追われて、直入・大野両郡の山岳地域に遁入した。弘安の豊後国凶田帳を見ると、

阿南荘には支族の大津留・武宮・松尾氏らが地頭御家人として名をとどめ、阿南氏は全くない。大友氏（中原親能か）の追捕をうけた阿南氏は直入郡（入田）、大野郡（緒方・三重・大野）の奥地に遁れて帰農し、雄志あるものが南北両志賀氏、一万田氏、戸次氏などの大友一族に仕えたらしい。

志賀親次（ちかよし）の家臣阿南惟秀、篠原目城（直入郡柏原郷中角村、岡城の支堡）を守る。薩將白坂石見守六百余人に將として来り攻む。惟秀出で戦へども衆寡敵せず、敗れて陽に降り、石見守を誘ひて城に入らしむ。石見守、惟秀をして後門を守らしむ。惟秀故に意を曲て之に事ふ。石見守深く信じて疑はず、惟秀竊に人を遣はして、親次に速に来り攻むべく報せしむ。天正十四年十二月二十八日、中尾伊豆守・大森彈正をして千七百余人をひきひ城を攻めしむ。惟秀、石見守を欺きて曰く、彼兵少く將士亦勇なし、出で之を伐たば之を破ること必定なりと。石見守之に従ひ兵を尽して出で戦ふ。親次の兵、山隈溪谷より衝て出で奮闘す。惟秀虚に乗じ火を後門に放つ、石見守愕いて十余人を引て出奔る。惟秀追跡す。偶々親次、佐藤右京進を將とし、二百人

を以て来り援けしむるに会し、老ノ戸口に於て石見守に遇ひ相搏して之を斬る。||豊後全史より||

阿南氏は直入郡にもっとも多い。次で大野郡だが、いずれも郡の南部地域に偏在し、聚落をつくっている傾向がある。南北海部郡地域では郡部に少なく、佐伯、津久見、臼杵などの市部に多いが、総体的には直入郡の四分一程度である。

### 阿南氏と穴見氏について

それでは阿南氏の異字同姓といわれる穴見氏の分布はどうであろう。穴見氏は大野郡が最多で約五十余、これに次ぐのが佐伯市で約三十を数える。（佐伯市には阿南氏より穴見氏が多い）阿南氏の阿南（あなみ）はもともと地名で、大分郡にあった荘園名（鎌倉時代）であることは前述したが、穴見（あなみ）もまた但馬国（兵庫県の地名で、しかも奈良・平安時代の荘園名である。||穴見荘は現在の兵庫県出石郡出石町にあった。||しかし、佐伯市、大野・直入両郡の穴見姓が但馬国の古荘園に起因するとは考えられない。

阿南氏の祖、豊後大神氏が祖神と崇める姫嶽明神（祖

母嶽大明神)は上代に嫗嶽とよばれた祖母山の神霊で、山麓直入郡入田郷神原(現在の竹田市神原)に祭祀された式内社健男霜凝日子神社のことである。祭神は豊後国志によると「豊玉姫命を以て彦五瀬命に配祀し、嫗嶽神となす」とあるが、これは祖母嶽神であるから、神名の健男霜凝日子命は祖母山の神格化と見てよい。

健男霜凝日子神社から一キロばかり神原部落の南、祖母山北東麓に穴森神社がある。大神氏の始祖惟基の母という花御本に通じた嫗嶽大明神の化身である大蛇神が住んでいたと伝える巨大な洞穴があり、そこに穴森神社が鎮座する。拝殿から見ると正面の岩壁上に本殿があり、直下の洞穴から湧出する水は池をつくり、淵をなし、溪流となる。元禄十六年(一七〇三)十月、地元神原の人々がこの洞穴に参拝し、洞穴の奥所で龍骨(大蛇の頭骨)を発見、これを藩庁に届けたので、宝永年間藩主中川久通は命じて洞穴上に重層する岩壁を穿<sup>うが</sup>って龍骨を納め、穴森神社と名付けたと伝える。

この神社のあたりは往昔波来合村といつて阿南荘を追われた阿南氏一族が住んだところらしく、一ころ波来合氏を称したが、志賀氏に仕えて阿南氏に復したという。

そして祖母山系の洞穴に祀られる嫗嶽神の信仰から、庶族のなかには阿南の文字を穴見に書き替え使用したものがあつたらしい。それは穴見氏が阿南氏と混在し、主として元禄以降に見られる名字であることで推察される。なお佐伯藩家中には側用人に阿南宗兵衛、給人格に阿南勇、中小姓に阿南唯七の三家があつた。このうち阿南唯七家は明治になって穴見氏に改めているようだ。西谷の阿南家(宗兵衛家)からは戦時中佐伯市長(第二代)をつとめた阿南卓氏が出た。

### 古代氏族から出た池田氏

続日本紀天平宝字五年(七六一)十月の条に「從五位下池田朝臣足継を豊後守に為す」とある。この池田朝臣は姓氏録によると、崇神天皇の皇子豊城入彦命十世の孫佐太君の後で、上野国佐波郡池田あるいは邑楽郡池田(ともに群馬県)に発祥した池田臣の一族、上毛野氏族という。天武天皇十三年、他の五十一氏と共に朝臣の姓を賜った。

また姓氏録(新撰姓氏録・弘仁五年万多親王撰)和泉皇別の条に、景行天皇の皇子大碓命の後に池田首<sup>おひと</sup>がある。

これは和泉国和泉郡池田（大阪府和泉市池田）にいた氏族であろうといわれている。

吉備の国とは備前・備中・備後・美作地方（岡山県および広島県の一部）の古称だが、古代は小王国を形成していた。大和を中心に河内・摂津・山城・近江・伊勢・伊賀・和泉・紀伊各国を平定統合した大和朝廷はしだいに隣接国に版図を拡張した。いわゆる四道將軍の派遣である。はじめて摂津から播磨・但馬を経て吉備に入ったのは、孝靈天皇の皇子と伝えられる大吉備津日子命、次に次弟日子刺肩別命、次に三弟若日子建吉備津日子命で、三代にわたって統治経営した。姓氏上、吉備氏族というのはこの若日子建吉備津日子命の後で、代々吉備津彦を称号にしたので、この氏族を吉備臣という。

景行天皇のとき吉備武彦は日本武尊の東征に従って越（高志）の国に行き、越地方の鎮定にあたった。そして後の越前国坂井郡坂井（福井県）に拠ったが、その子思賀部は廬原国造（静岡県庵原郡）を賜った。国造本紀（先代旧事本紀）には吉備武彦命を池田・坂井君祖としてある。吉備氏族は越前坂井郡から今立郡にかけて繁栄したようである。この一族を池田坂井君とよんだが、後には約

めて池田君と称した。すなわち吉備氏族池田氏である。

池田氏には古代の上毛野氏族、吉備氏族をはじめ、中世以降は清和源氏、宇多源氏、藤原氏族、紀氏族、橘氏族など各大族の系統がそろっている。太田亮氏の「姓氏家系大辞典」には三十七家の異流池田氏があげられているが、この全国的な苗字はどのように整理統合してもそれ以上の異流があるのではなからうか。

### 備前池田氏と因幡池田氏

秀吉と家康が争った天正十二年（一五八四）の小牧・長久手の戦は、豊臣政権を成立させる大きな賭であった。この戦に池田勝入斎信輝（実名恒興）は長男之助とともに討死した。勝入斎父子の壮絶な死を悼んだ秀吉は、信輝の次男輝政にその家督を継がせ、美濃国大垣城主にした。この池田信輝の母養徳院は織田信長の乳母であった。

池田輝政は秀吉に仕えて岐阜城主になったが、やがて徳川家康が関東八か国に封ぜられると、三河国豊橋に移った。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原戦には徳川方（東軍）として奮戦、功により播磨五十二万石を与えられて姫路城主になった。輝政の後は長男利隆が継いだ。そ



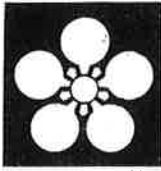
蝶の羽揚



蝶羽揚丸



守園祇



鉢梅

の嫡子光政のとき備前岡山三十一万五千石に封ぜられ、池田氏宗家として明治に至った。輝政の次男忠継とその跡を継いだ三男忠雄は因幡鳥取三十二万五千石に封ぜられたが、これは忠継、忠雄の母が徳川家康の養女であったためという。

この鳥取藩の支藩因幡若桜一万五千石は忠雄の子光仲の四男清定に封された。清定の裔、五代定常は冠山と号し、佐伯藩主毛利高標、近江西大路藩主市橋長昭とともに、寛政の学者三大名として有名である。

さて、寛政重修系譜には、この池田氏を清和源氏頼光流と伝えている。すなわち源頼光の子頼国の後で、多田源氏といわれる兵庫頭仲政の子で滝口紀藏人奉貞の養子になった紀右馬允奉政にでている。奉貞の祖は中納言紀長谷雄で、その孫維実が母方

の祖父美濃国池田郡大領維将の後嗣になり池田宮内少輔と号したので、代々池田郡司紀某と称した。つまり清和源氏で紀姓というわけである。ところが別の説では池田勝入斉信輝の父恒利は紀伊守と称し、織田信秀に仕えたが、その先祖は摂津国豊島郡池田の人という。恒利の数代前にあたる池田九郎教依は楠氏の縁者で、教依の子十郎教正は楠正行の庶子だったといわれる。もともと教正から恒利までの系譜は明でない。なお池田家の紋章であるが、備前池田氏は「揚羽蝶」備前蝶、「蝶の丸」輪蝶、「祇園守」「尻合せ三ツ笹竜胆りんどう」、因幡池田氏は「三ツ葉葵（徳川一門として）」「六ツ葵」「丸に揚羽蝶」「因州蝶」などである。

### 各流池田氏と池田荘

このほか著名な池田氏には、藤原氏秀郷流、尾藤氏の裔で紀伊国那賀郡池田に起った池田太郎知信の族（紀伊池田氏）、また宇多源氏佐々木氏族京極流、京極三郎左衛門尉宗氏の子で、近江国蒲江郡池田に住んだ池田太郎定信に出る近江池田氏があるが、この近江には甲賀郡にも池田の地名があり、甲賀党のなかに池田氏がある。

秀吉の旗本として万石取りになった池田伊豫守秀氏は、近江池田氏で信長に仕えた三郎左衛門秀雄の子で、伊豫・大和・紀伊のうちで二万石を領したが、慶長五年九月関ヶ原の戦に際し、西軍（大坂方）に属して戦い、敗れて高野山に逃れたが、藤堂高虎の取りなしで東軍に降り助命された。この池田氏の家紋は「丸に釘抜」と「蝶」。

山田、吉田などの地名が全国各地にあるように、池田の地名も全国的である。従って地名から起った苗字が多いわけだが、ここでは池田荘といわれる往時の荘園と地名の関連について記しておこう。河内池田荘は河内国茨田郡にあったが、これは中世の荘園で、所在地は現在の大阪府下寝屋川市内。遠江池田荘は遠江国磐田郡豊田村池田で、現在は静岡県磐田市内になっている。和泉池田荘は和泉国（大阪府）和泉郡浦田地域、いまは和泉市内である。大和池田荘は大和国添上郡池田（現奈良市内）。美濃池田荘は美濃国池田郡で雲門荘の一部に立券、現在は岐阜県揖斐郡池田町になっている。越前池田荘は現福井県今立郡池田町。備前池田荘は現在の香川県小豆郡池田町（小豆島）だが、もとは備前国児島郡に属していた。近世の初め讃岐国に隸属、寒川郡の一部になったが、明

治十三年に小豆島が分離し小豆郡ができた。紀伊池田荘は現和歌山県那賀郡打田町。このほか伊勢に池田蘭と池田別符があり、昔は伊勢国河曲郡池田、いまは三重県鈴鹿市に属している。これらの荘園の池田邑からはいずれも池田氏がでている。

### 池田の地名を負った佐伯の池田氏

荘園以外にも池田の地名は多い。これらが各流池田氏の起因に深い関わりをもつことは前述したが、現在の行政区轄から池田の地名を見ると、大阪府下に池田市があり、前出の香川、岐阜、福井三県のほか長野、徳島に池田町がある。池田市は旧摂津国豊島郡池田で、戦国時代細川氏の宿将池田筑後守長正・子民部大輔勝正の居城があったところ。また徳島県三好郡池田町は阿波三好氏の発祥地で大西城跡がある。

それにしても九州地方には池田の地名がどのくらいあるだろう。私の調べた範囲では、市町村名にはなくその区域内の大字または字に数か所あるようだ。なかでも多いのが福岡県の旧筑前地域で、宗像郡玄海町池田、筑紫野市池田、朝倉郡杷木町池田、早良郡（福岡市に編入）

早良町池田、糸島郡前原町池田など五か所にある。しかし、筑後、豊前地域にはなく、その他は熊本県（肥後国）旧飽田郡池田（現熊本市内）と、鹿児島県（大隅国）肝属郡大根占町池田がある。また大分県（豊後国）では佐伯市池田のほか池田の地名を見出せなかった。

さて佐伯市池田地域は旧藩時代には久部村とよばれ、水ヶ谷・蛇崎の二枝郷をもっていた。明治五年（一八七二）塩屋村が佐伯村になった時点で、久部・蛇崎（枝郷水ヶ谷に属するものを久部と総称した）を池田村と改称、同八年に実施された大小区制によって長谷・青山・堅田・長良四村と合併、二十七小区と称されたが、区制は同十一年に廃止され池田村が復活した。（池田の村名は池沼の多い地形による）

それでは佐伯地方の池田姓はいつごろ出来たのだろう。安政四年（一八五七）二月の佐伯領内大庄屋名と年貢高を記録した文書によると、床木（藩領）、久部、長瀬、蛇崎の四邑は藩領二十三か村内にありながら年貢高が別で、庄屋（小庄屋）がこれをとり仕切っていた。久部村の庄屋は大庄屋並の扱いをうける雪太郎、蛇崎村の庄屋は甚右衛門である。（いずれも姓は記入していない）

この甚右衛門家はいつの頃からか池田姓を称したが、これは私称であった。明治五年、戸籍法施行による平民称氏の許可があると、蛇崎部落の池田庄屋縁故者はいずれも池田氏を名乗ったようだ。佐伯市では蛇崎の人といえば、池田さんかそれとも肥川さんかといわれるほど、池田姓は同部落に多い。そして肥川姓がこれに次ぐわけだが、この二氏はもと同族のようである。それは池田氏が「丸に梅鉢」、肥川氏が「窠に梅鉢」を家紋にしていることでわかる。もちろん肥川氏も明治初年の平民称氏の許可によって、部落民の苗字になったのであるが、その由緒はおそらく部落に伝わる言伝えによったものである。蛇崎部落の氏神三島神社は宝暦中（二百三十年前）の御領分中寺社記には久部村地主神、葉明清記勤めと記され、天保中（百五十年前）の堅田郷神名控には塩月村疋田和泉持ち蛇崎村三島社となっている。これによってこの神が当初地主神として祭られたことがわかる。

四国・九州の沿海民が崇敬した三島社は瀬戸内の大三島に鎮座する大山祇神社で、中世から近世にかけて散亡した越智河野党の子孫たちは、その落ち行く先々に氏神として三島社を奉祀したという。私はここで同じ越智氏



の流である新居党に吉田・矢野・高橋・肥川・井手などの各氏があることを記しておく。

六代佐伯市長池田利明は蛇崎の出身、父君長作は昭和初年上堅田村長をつとめた。佐伯地方の池田氏がたとえ明治以降の新姓であるとしても、前市長池田によって著名な姓氏の一つになった。

ところで故佐久間英氏（姓氏研究家）の統計によると、全国の池田姓は約三十万、その順位は二十七位になっている。佐伯市内の池田姓は約百五十、うち池田地域（蛇崎を中心に）は約四十余で、とくに多いというほどではないが、南海部郡内にわずかしかないので目立つ。

（つづく）



## 会員の出版

### 山菜譜 新装版 片岡 博著

著者が昭和五十五年に出版した山菜譜の新装版である。版型は小B6判とあるが、新書版とほぼ同じ大きさの本で、山野を歩く時の友として携帯に便にしている。

一般によく知られているフキノトウ・ヨモギ・ツクシからフジアザミ・クワまで、九十五種類の山菜をあげ、一種につき二頁にわたり、植物のイラスト、故事来歴から生薬、調理法まで達意の文章で綴られている。

中にはまるで知らないものもあるし、これが食べられるのかと驚くものもある。所々に挿入された随筆も楽しく、さながら名随筆を読む思いがする。

折りもよく、これから山菜の萌え出る春の季節、この本を片手に山菜をたずねるのも楽しいことであろう。

（定価一、〇〇〇円 実業之日本社発行）

・書店でお求め下さい。